

# こころやりの巻

## 愛樂の巻

愛樂……………一

前編

後編

無量光……………二  
無邊光……………四  
無碍光……………六  
無對光……………七

炎王光……………一八  
清淨光……………一九  
歡喜光……………二一  
智慧光……………二二  
真善美……………二四  
不斷光……………二六  
證得……………二九  
無對光……………三三  
不斷光……………三四  
智慧光……………三八

## 愛樂

大原談義に云はく。人をして欣慕せしむるの法門はしばらく淺近なるに似たりと雖自然悟道の密意は極めて是深奥なりと。

導師觀經の疏に觀經に如來依正二莊嚴の相を説て人をして欣慕せしめ給ふと。

如來自境界は甚深難思第一義諦にして一切に超絶し給へり。しかれども衆生を愛する大慈悲心より無上の愛をあらはすために無盡の莊嚴妙色身相をもて衆生に應じて現じ給ふ。

八萬の相好をもて上なきうるはしき相をかざりて衆生に愛慕の念を起さしむ。

無上の愛念が無上の相好と現はれまた衆生をして欣慕せしめんが爲に至美の相を示し給ふ。

宗祖大師の

我はたゞ佛にいつかあふひ草

心のつまにかけぬ日ぞなき

如來は衆生をして慕はしめんが爲に無上の相を以て衆生を待ち給ふ。衆生は愛慕の心を以て觀せんと樂欲す。

宗祖が如來に欣慕の深きねてもさめても戀ひつこがれつゝたゞみほとけの妙なる月の面かげのみ行住坐臥時として心のつまにかゝらぬ時こそなかりけらめ。つねに慕念深からざれば妙相を感ずること能はず。

宗祖大師の

かりそめの色のゆかりの戀にだに

あふには身をもおしみやはする

世の人がかぎりある肉の情のため肉は靈の眞に比すればかりそめ(虚假)にはあらざるや。それでさへ、世の中には一旦の痴情のために身も命もわすれて、またこれが爲めには思を焦し神を煩はしなどするものまゝあるにあらざるや。況んやいま心靈が更生して眞理の命に入らんが爲めに如來の聖靈に對する愛慕戀念のために有爲の露の命はさのみにをしむべきぞ。世の人のあさましき肉の爲めには身命を忘るるもの多し。いかにして無上の眞理高尚なる靈に對する戀慕の心はさまではおこらぬぞ。人の肉の戀に於けるが如くに聖靈を慕愛せば心靈交感して靈に入り更生すること何ぞそれかたからむ。

靈と肉とは、神聖態と賤劣なるとの天地の懸隔あるも、戀情相同じ。孔子言はずや賢を賢として色に交へよと。謂ふころは賢人を慕ひ愛すること美しき色を愛するほどにあらば必ず自分も賢人に感染同化して賢徳を得らるゝなりと。

宗教に謂ゆる如來の聖靈を尊とみ敬慕愛念すること、紅顔美態を愛することくならば、戀念繫想して止まざれば、必ず感應して、若しは夢定中に若しは想念の中に於て妙相を感ずることを得べし。

般舟三昧經に、念佛三昧に入て如來の靈應を感じんと欲せば、行住坐臥、一切の處一切の時に於て、常に如來の妙相に慈愛繫念して暫らくも捨離することなかれと。今譬を以て云はんに舍衛國に一人の年若かき遊治郎ありて遊廓娼樓に遊びて巫山の夢を見ることしばしなりき。しかるに彼の郎己が家に歸りてありける時も、彼の腦裡に印象せるたはれ女の面かげ宛然として目前に彷彿せりと。

般舟三昧の行人も一に専ら如來を慈想繫念して捨てざる時は如來宛然として目前に現はるゝことまた然りと。

吾人は般舟經の此御文と、宗祖大師の「かりそめ」のうたと、孔子が賢を賢として色に交へよとの言葉によりて、熱らおもふに肉の爲にむかしより心を焦し思を煩はしたる事が詩に表はし歌にのべて發表したるさまを見てさつせざるはなし。それほどにかりそめごとと煩はしたりし神を、若しも靈の方面に向つて用ひしことならば、さだめて聖き靈き心靈態として成佛得道すべかりしものを。さりともしらずで心靈を空しくあだなることにすてはてたる人々のあさましさをおもふ。

吾人は古人がかりそめのことに用ひたる心情を惜ししとおもふことを、二三の文をあげて見んとす。百人一首の中に伊勢の歌に、

なにはがた短きあしのふしの間も

あはで此の世をすこしてよとや

いかにせまり來りしとて、わづかばかりのふしの間ほどもあふことが出來ずして終りはてしまふものかとて、その消えはてしぬかとおもふ彼が心情のせまりしさまをおもひて、いかに同情のなみだをおさゆるであらう。若しも左ほどに聖靈にあくがれていつに此身の業障の雲ふかくして、これまでに焦るゝころも逃げられで、むなしくやみぢにさまよふか。聖靈の月をみまほしきにしかるに無明の雲によりて靈性の眞面目を見ることが能はずして一生空しく過ごしゆくことのかなしきや。あせる心はふかけれど、されどもいかゞせん、彼此の三業相かなはずして、あふことのかなはずし

て空しく過ぎゆくことのかなしきかぎりならずや。

和泉式部が

あらざらんこの世のほかのおもひでに

今ひとたびのあふこともがな

ともしや是が爲にはいきながらへて居らうともおもはぬものとの覺悟ではあるけれども、せめては死したのちの亡魂になりてのおもいでに一たびあふことのあらばやと是ほどもしや念佛三昧海に投じたるものなれば身や命はもはやながらへ居るとはおもはねども淨土にゆきし身ながらも一たびなりとも此世にて拜み奉りて、淨土に拜むのと同じのなれども、せめてはとおもふてあらざらん此の世の外のおもひ出とまで、命をかけて愛念し上つたならば、いつかは拜まざらんや。法華經に衆生質直にして一心に佛を見んと欲して自ら身命を惜まざれば便ち出でて爲に説法すと。肉によるの氣力つきたる處に靈界現前す。肉の心命盡る時靈復活す。何ぞ夫れ疑ふべきぞ身體死して後とおもふことなかれ。

平兼盛が

忍ぶれどいろに出にけり我が戀は

物やおもふと人のとふまで

まごころに深く愛慕の念があふる時はいつしか念は面にあらはる。如來を念じて行住坐臥に瞋目瘡晒失意の如くならば此定得やすしと。かくまでに月の面に繫念してやまざる時は、忍ぶれどいつしか面てにあらはれて物やおもふと人に問はるゝまでにいたる。

至心に深く愛慕する時はいつか三昧成せざらん。

清少納言が

夜をこめて鳥の空ねははかるとも

よにあふさかの關はゆるさじ

これは古事があり、鳥がなきし時にあふことを契りしを、さりながら鳥のそら音を  
もてなくまねをして、はかりごとであはうとしても、決してはかりごとではあふこと  
が出来ぬ。實に至心に深く愛慕の心なくして虚假名聞の念佛にて三昧の門を開きて靈  
に感せんとしても決してそれはゆるさぬことである。

彼此三業の相應の門、即ちあふさかの關を開きて三昧加持の妙處にいたらんには一  
切の虚假をすてて、至心に深く愛慕するに存す。

二條院讃岐が

我が袖はしほひに見えぬ沖の石の

人こそしらねかはく問もなし

念佛三昧の窟を開きて圓満の月の御面を拜まんとするもいかげせん、業障の雲ふか  
くして彼此のへだてを除きがたし。宿罪のふかきを感じて懺悔の涙かはくひまなし。  
私共には根本罪と自造罪との罪ありて之が爲に自らさはりとなるへだてとなりて自  
性天真の如來と戀愛の御手をたざさへ御互に胸襟をうらあけて兩方を一として融合し  
かたりあふことの出来ぬうたてさよ。

所謂三因佛性有りながらへだてらるゝぞかなしけれ。

いつか罪惡の獄屋よりゆるされて清淨無垢の靈態となりて彼此の三業相滌離せずと  
いふ状態になることの出来るのであらうと。きのふも空しく過し、けふもいたづらに  
くらしぬ。おもへば袖のかはくひまこそあらめや。

式子内親王が

玉のをよたえなばたえねながらへば

しのぶることのよはりもぞする

至心に深く愛し慕ひ奉る月の面をながめる時に初めて自性天真の空を見つくる  
とかや。

深く戀慕して自ら身命を惜まざれば即ち出て應現したまふと聞きつれば、とても

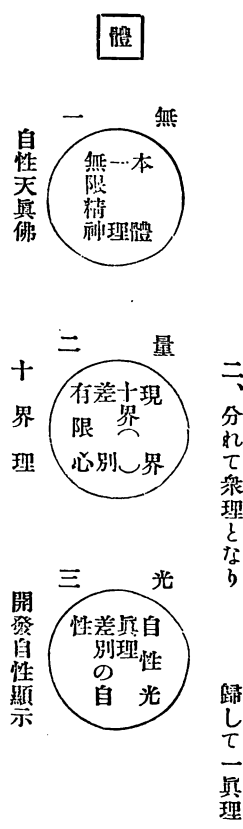
ことに、たえなばたえね、一大事のこの事をとげずして、空しく活くるよりは、むし  
ろ死ぬにしかず。一心に三昧定に入りて皮骨連立して枯死するも、三昧を得ざればむ  
しろうごかじと、このこと成らずして活きて居し、とてもとてもいま成らぬならば年  
老ぬれば身も志氣も隨て衰へぬべし。しかればながらへて何の甲斐がある。靈性復  
活して靈の生命となりてこそ菩薩の天職を盡すために命も要すべけれ、それだに成ら  
ずばいきながらへるべきこともいらぬなりと、これまでもまごころに深く愛慕の念  
より、三昧に入らば、などか成せざることやある。

宗教的關係の神人兩性の交感響應を欲する宗教的衝動として神符の靈應を憧憬欽慕  
することは孔丘が所謂賢を賢として色に交よと。

愛戀の情の濃なるによりて神人交感して更生す、而してまた靈性を養ふことは親子  
の關係の如くなるべし。如來真我の中に安立して情操大安穩にして平和ならんとせ  
んには親子の如くなるべし。

金剛の意志となりて靈的活動をなすのは欲望即ち世つぎの行にあり。感情的信仰  
は意志の方便なり。目的は聖靈菩提心となりて實行行動するにあり。

無量光



二、分れて衆理となり 歸して一眞理

法身如來藏

照無量差別之本性、顯示清淨法身一如天真之主明

法身如來藏性は萬物の根底、十界依正之を本體とす。十界の色心是より産。

常恒に産出す。

一は萬物を生ず。真空法身。

無量差別の法界悟迷善惡より不守自性十界の理。

一は本體。一元理にして不可思議是衆理の根底

二は現界。一理自性を守らず差別の個々の主質を執す即ち十界の理

三は光明。此光にて個々差別の自體の根底を照すときは萬物悉く自性一眞理ならざるはなし。

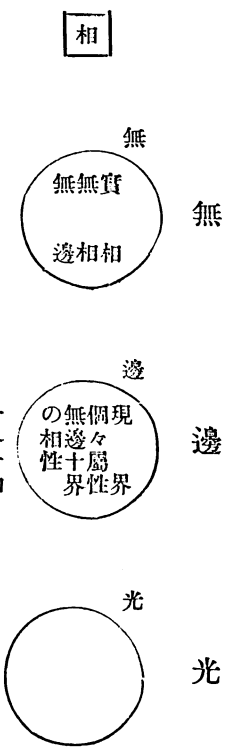
萬物此光により見れば如來の體、常住ならざるものなし。

一、二は無量にして光に非ず。

一は無差別の無限量、二は差別性の無量個々、三は無量の光、無量差別の自性を照す時は一眞理體のみと見る。

一は彌陀の本體として同時に一切萬物の根底。二は彌陀法身の根底に垂きて未を追ひ差別個々主體を執して自己とし十界無量の境界顯はる。

三、本體の彌陀は衆物の根底として萬物を流出するのみならず、自性に歸せしめんが爲に本體を發展して自性を照すべき眞理の光明體となり、個々の根底を見せしむ此光によりて照さるゝ時は個々の心底悉く彌陀の自性と一眞理ならざるはなしと覺る之を無量光と云ふ。無量の差別を照して一眞理なるを覺らしむ光なり。如々理如々智。



一神教 相の上になつ 多神教 用の上になつ

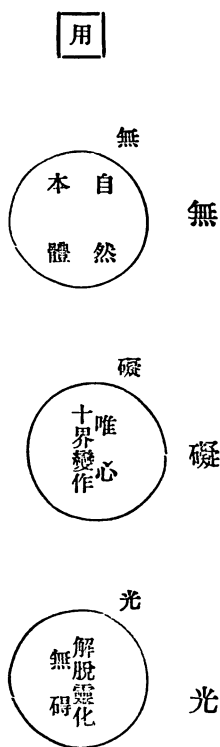
沉神 體

一、本體の相は實相、色もなく相もなく目に視手に觸るべきに非ず。

二、無相の相は相ならざるなし。無より有を生じ無邊の差別の屬性が顯れ出づ、十界の衆生相貌の殊、心性の差別實に無邊なり。屬性とは十如の理なり。相と性と體と力等の屬性に於て悉く此屬性は具備すれども之を使用し活動し作爲するは用に屬す。

三、一は二を( )し十界無量の衆生に各無邊の屬性ありて各自の屬性を眞理なりと誤認して此屬性煩惱を反離せば是無邊の聖徳となるべく( )三の無邊光は能く衆生の心身の性と相とは此光にて能く其性相の眞理を照し見るときは煩惱是菩提なることを悟らん。衆生は心開きが故に眞理を以て罪惡として此光にて照す時は罪惡の自性轉して聖福となる。

此光は交徹靈通して空間には十方を盡して交徹し時間には無始無終の三際を盡して靈通す。故に無邊と云ふ。



一、本體は天然の自爾造作のよくする所に非ず。

二、天然の無作の本體には不思議の用あつて活動的作用あつて十界の個々の心に變作の功能ありて唯心の所變として十界三千の法界を造り出す。

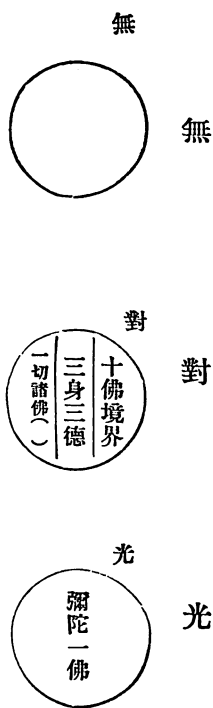
本體は無碍なれども一たび十界の變作の境界には自己の機制の束縛に於て少しも自由を得る能はず。

十界三千は唯心の所作たる時は本を忘れて末に隨ふが故に眞理に稱はざる妄業を造つて妄の生死を受く。

三無碍光彌陀は自己の本體より出たる衆生をして本に歸し解脫靈化せんが爲に盡十方無碍の光を放ちて報應一身を變現して常に無量の衆生を化( )して止むことなし。

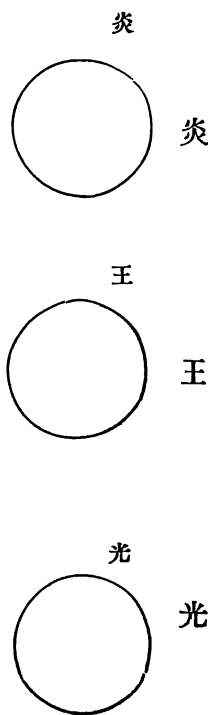
第一は無始より已來第二を産出して常然として止ことなし。第三は無終に第二を照して自己の性を示し其誤を覺らしめ妄業を轉じて解脫靈化して止ことなし。

第一は天然にして眞理にしてまだ顯れず。第二は眞理に皮殻を被り第三は解脫靈化して眞理の顯現し。



(1)は前の三大を統一し三身を致し三徳を總括して十佛の自境界唯佛與佛の境。

(2)は( )一にして即して之に對時的ならず。一即一にして絶對なり。十佛の自境界にして十佛を統て十佛の( )十佛を徹照して即一體にして絶對超勝獨明。一切諸佛を統一して一切諸佛に超絶し十佛自境界にして十佛に超越し絶對獨明。之を無對光。



無對は上の三大の神の方面を統一して絶對の徳を示し、炎王光は三徳を覆ふ神を覆すべき無明罪惡の心質を滅殺する光なり。

(1)の眞理を覆ものを無明と云。(2)の眞理の屬性を隠すものを塵沙の惑と云。

(3)に不思議の妙用を得るものを罪惡及び業障と云。性の罪惡と造作の罪惡となり。

惡の主體性と屬性と作用とは上の靈徳を障ると共に下の人の心理機能と客體の光明との致一的の關係を障るものなり。故に之を滅殺せざるべからず。

心理に現象なす光は鏡中の像の如し。水中の月の如し。已に靈化しぬれば藍を以て染たる糸の如し。

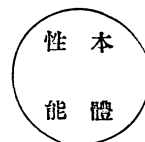
上の三徳は形而上的にして普遍的に神が一切を普く照して個々に被らしむ。下の三光は心理機能に個々の心理に關係し證明し認識すべき處の光明にして個人的なり。

清 淨 光

個人の心理

感 覺

清 淨



即ち本體

世 間

超世間（彌陀及び淨土の清淨を  
感覺界に覺むべからず。超感覺）

1 個人の心性もと本體にして其量十方に周徧し

2 迷に依て六識

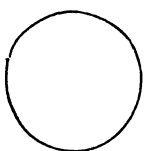
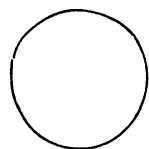
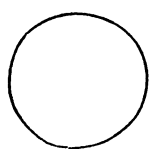
3 光明によつて感性清淨なる時十方洞然。見聞覺知清淨法界ならざるなし。六根

清淨にして身心、清淨。法華解に云。

六根功能發明せば情塵を脱去し清淨根を以て清淨境を照せば遂に山林周匝禽獸嗚呼  
饑鼻沾唇殊形異意も實相に非ざるは無し。妙法に非ざるはなし。即ち一身二面圓に證せ  
ば六處に徧して常に彰本欠虧せず。曾て窒碍なし。

歡 喜 光

感 情 至美歡喜



1 喜怒哀樂未發。

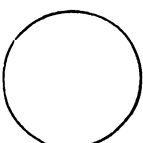
2 根本惡衝動の我的感情、我癡、我見、我慢、我愛等の無量の罪惡の惡欲望惡衝  
動を以て我と謂へり。是其根本惡動機

個體をつくる自家保存の動物生活の原始より發生したる動物的欲望に外ならず。之が

衝動よりこの主我欲望がこの身心を司るときは喜怒哀樂常に眞理に反對して發動す。  
畢竟して自ら平和なる生活とたゞへいかなる幸福を以てするも彼は満足すること能は  
ず。

3 眞理の光を被るときは感情の惡素質已に脱却する故に歡喜平和歡喜に滿さる。

智 慧 光



眞理の根本と及び歸する處を知らず。中心點と終局とを覺ら  
ず之を迷と云ふ。

I

2 後天に五利使あり。

自己の眞理は何れにあるをしらず。根底を忘れて枝末を追ひ覺め塵を追ひ覺にそむ  
き有限の個體を執して自己の根底は無限なるを識らず。生滅にあつて無生を悟らず。

3 智慧光に接するとき自己の根底是本體。上の三大の本を明らめ十界三千は唯心  
の所變なることをさとり三千空假中なるを知り三千皆是彌陀の本體の中に起滅し能く  
其體を覺むる時は悉く彌陀の眞理ならざるものなきを悟る。

生滅は衆生有限の迷より感ずる所なり。本來彌陀の中には眞實の衆生と煩惱と業と有  
ることなし。不生不滅即ち無量壽不生不滅にして常然として眞理の光となりて活動す  
智慧の本質は至純理性態にして靈徹せる大智慧光明能なり。大圓鏡の裏に萬物炳現す  
るが如し。之を智慧光となづく。この智慧光を發すべき本性能は彌陀の法身より先天  
的なる賦與せられたり之を佛性と云。いまこの鏡を鍛練して照耀ならしむるは智慧光  
と云ふ。

衆生は法身彌陀の本體より出で、無量光壽の徳が天然の皮殻に覆はれて光は無明能

となり聖徳は罪惡となり不生滅は反對なる生滅と現じたり。然れども夫れが皮殼を脱却して無量光壽に靈化すべき性能具備せるものと知る。其本源を照し無限を認めしめ實體を不生滅を忍らしむ。是による精神生活は眞理なり。しからざるものは眞理に非るなり。眞理に非る生活は終局の目的なしにして大虚の浮塵の如く名づくべからざる生活、大地を離れたる草の如く質の結ぶべき理なき精神生活なり。是偶像塑像かわら人形の如くあはれむべき生活なり。此光自己の理性を顯現し無生忍を悟らしめ遂には無上正覺を證得せしむる。

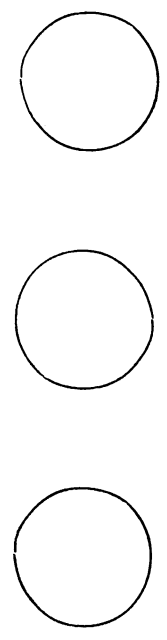
迷悟の本源を見、迷悟の分るゝ處、迷ひは六凡となりて悟れば四聖となり、十界十如三千の法界歴然たるは是俗諦、三千は本法身の本諦にして眞空の一理とさとするは本諦、三千其自性を照す時は即ち無量光

眞 善 美

眞善美は主觀界にありや將た客觀にありやは主觀にあり。自己の心機即ち宗教機能よく發展して神の感覺に觀すれば六識清淨にして淨瑠璃の中に精金を盛るが如し。天地悉く淨瑠璃世界なるを感ず。鈍き眼鏡を以て見れば茫然たるも明かなる鏡を以てせば明瞭なるが如し。又自己の感情精神にして快活なるときは見聞覺知として無怡快樂ならざるはなし。智慧光によりて主觀明かなるときはすべての本元より萬事となりまた終局に歸する眞理として明かならざるはなし。不斷光に意志を靈化するときは客觀界すべてのものはみな彼を助け彼を靈化し解脱し我が勇氣を鼓し意志を堅固にす。罵詈譏諍は我意志を鍛練する巧工、失敗と蹉躓とは意志を成功せしむるの良器、艱難困苦は意志を精練するの妙機。

彌陀無量の事物によりて客觀界に俗化して我を養ひ我を訓へ我を化する機にあらざるものなし。唯自己が菩提心即ち不斷光を離るゝが故に萬事悉く是彌陀の治生産業なることを知らず。

不 斷 光



意志光明解脱靈化

上求下化の願望に於て不斷常ならしむ。

不斷に精練す。

靈化すれば自ら間斷なし。自體となるが故に。

空間的には物體の最も密緻なる接する(もの)は極めて堅固なる性なり。物の至て堅固なるは金剛石白金の屬なり。空隙の愈なるものはたやすく空氣を洩すべく、今不斷とは意志が彌陀に靈化し龜質を脱却し不動の意志とし最も鞏固なる道德的志操として金剛の如くなる意志を不斷と云ふ。

時間的に念々彌陀の意志實現をいのりしも未だ自己の情意が世俗的意操が頑石の如く固かりし間は其の(空隙)よりも彼の靈化の光を被りたるも漸々に自己の龜質脱却し一心に意を注ぎ終に之に化せらるゝにいたつては、いまは却て自己の光りとなり來る。たとへば布を染るには初めは藍と布とが別々なるも深く染み込んで布が藍となりて布の自己の色となる如し。

薰染同化するの故に靈化の意志となり靈化の意志には任運自然にして意志として彌陀ならざるはなきが如し故に不斷光となづく。

空間態にいはゞ彌陀の意志と自己の意志の間斷毫もなきなり。

不斷又平生

聖種性

習種性習慣性となりて最も鞏固なる聖靈態精神

八地已上任運無功用といふも靈化の意志なり。入正定聚より正覺に至るまでの意志なり。

法華解是義已能演說一句一偈至於一月四月乃至一歲諸所說法隨其義趣皆與實相不違背若說俗間經書治世語言資生業皆順正法

三千世界六趣衆生心之所行心所動作心所戲論皆悉知之是人有所思惟籌量言說皆是佛法無不真實

論註。願菩提門。菩薩この三種願菩提門の法を満足することを得べし。何らか三種なる。

一 無染清淨心。主我執著の幸福主義を脱す。自身の爲に諸樂を求めざるを以ての故に菩提はは無染清淨の處。若し身の爲に樂を求めば即ち菩提に違す。是故に無染清淨心は是菩提門に順するなり。

二 安清淨心。一切衆生の苦を抜くを以ての故に。菩提はは一切衆生を安穩にする清淨の處なり。若し作心して一切衆生を抜て生死の苦を離れしめずば即ち菩提に違す。是故に一切衆生の苦を抜くは是菩提門に順す。

三、樂清淨心。一切衆生をして大菩提を獲せしむるを以ての故に。衆生を攝取して彼國土に生せしむるを以ての故に。菩提は是畢竟常樂の處なり。一切衆生を畢竟常樂を獲せしめずば即ち菩提に違しならん。此畢竟常樂は何に依てか得る。大乘門による大乘門といふは、曰く彼の安樂佛國土是なり。是故に亦衆生を攝取して彼國土に生せしむるを以ての故に是を三種の隨願菩提門の法満足せりと名づく。

## 證 得

上人臨終に先だち弟子たち三尺の彌陀の像をむかへ奉り病床のみぎにたて奉りてこの佛おがみましますやと申すに、上人ゆひにて空を指し此佛の外に又佛在す拜むや否やと仰られて即ち語ての玉はく「凡そ十餘年よりこのかた念佛功つもりて極樂の莊嚴

及佛菩提の眞身を拜み上る事常の事なり」と。

聖光上人平生の祥瑞甚だ多し。或は親く和尚を拜し或は彌陀を見上り或は極樂の依正目の前に現じ或は釋尊の光明身の上を照す。

法然上人口稱三昧を發得し六十六建久九年正月七日別時念佛の時初に先明相顯はれ次に水想影現し後に瑠璃地現前す。同二月に寶地寶池寶樓を見たまふ。其より後連に勝相あり。或時は左の眼より光を出す。眼に瑠璃あり形りりのつばの如し。或は西方を見玉ふに寶樹列り高下心に隨がひ或は座下寶地となり或は佛の面像現じ或は三尊の大神を現じ或は勢至來現したまふ。或時は寶鳥琴笛等の聲をきく。

三昧發得の後暗夜に燈燭なしといへども眼より光を放ちて聖教をひらき室の内外を見玉ふ。深更に稱名す、聲清朗なり。身光赫奕として光り疊二帖の上のみてり。明かなること暮山に望で夕陽を見が如し。

### 清淨光

ルーテルが友人の頓死を見し瞬間天國は明煌として其胸中に現る。

### 歡喜光

仇恨、鬪諍、忌妬、忿怒、放逸、殺害、是等のサタンの暴力あり。この猛勢常に杖を啣んで善良慈悲寛容忍耐等の善美を蠶食せんと進軍しつゝあり。吾人の胸中にも慾望ありて進出しその求むる所自己の精神の安靜と平和を破壊す。

スピノザの所謂平安と神の愛とを得んことを希すべし。

超世間の光明は胸中に養はれ一種超言語の妙調はその精神の奥域に感じ得らる。至深至妙世間欲望の對象失はれて快樂共に失ふ如きに非ず、是永劫の悅樂。吾人胸中の慾望の風波歛まり大海明鏡の如く靜なるに至ると同時に

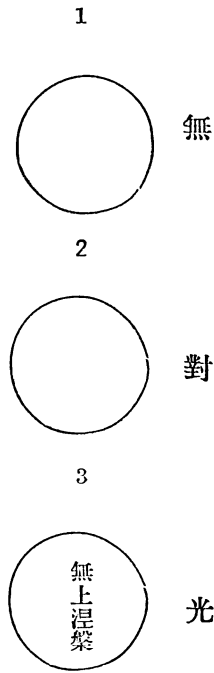
スピノザ的状態を敘述して曰く「情慾の暴動の後には心自ら靜かに、意志は慾望を離れて醇となり、利己の慾心を離脱せる心情は無意的に純粹且つ無限の歸依心を起さしむ。此愛はまことに精神の安息なり。



ゲイテは此處に生活の難風雨を逃れて息を休め、シユラエルマツヘルは幼時の樂園の失はれて疑惑の中に葬られし時此處に宗教と信心の實質を見出したり。

今やあらし慾情は眠り狂へる働作消失せて人類の愛ここに萌し神の愛こゝに生れぬと。

自己欲望を拒否し濫容にしてせまらざる心あらはれたり。こゝに於て神を愛すると同時に友を愛す。かゝる心は即神と致し佛性の光明を發揮せる状態にして四顧一として無限の悦樂を與へざるものなく胸中の一切的ならざるものなし。平和と満足とを吾人に與ふ。こゝに於てその同胞を見るに凡て神聖にして愛らしく利己的の怨恨なく惡憎なく偏執なし。之を神人合一と云、之を極樂と云。



第三は無上涅槃の極樂なり。唯佛與佛の境、果分不可説、十佛自境界、之を無對光と云ふ。

此に至らば、全然靈化し無上の極果には果分不可説。

之を必至滅度の願と云ふ。同時に

第二は相待にして三身相待し因果位を異にし或は因分を現して菩薩等の種々の身を現して衆生を度し、或は毘盧の法身及び十佛の境界となり、種々無量の身。

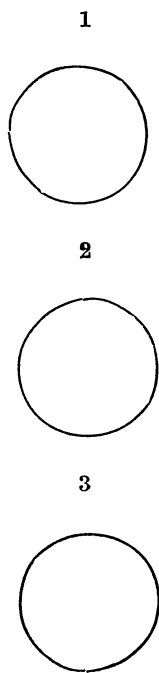
第三は必至滅度の極樂を無上涅槃と云ふ。是果分不可説の境、十佛の自境界とも無

爲法身とも常寂光、清淨法身、身土不二、三身即一の主伴不二、入一法句、第二還相回向としては因分の身を無對に相待をなすが故に、一方面より見れば常に菩薩の相なり、又縁覺なり、また衆生なり、應身なり、報身なり、名づくべからず、測るべからず。

無對同體の異面なれば一の阿彌陀佛が無量の佛とも菩薩とも三乘ともなりて恒常不斷に衆生を度す。無對に相待を示して果分の身を現じ因分の身となり、常に寂にして常恒に顯助す。譬ば淨摩尼珠の鏡の如し。男より見れば男の像が現じ女より見れば女の像を現じ種々の身を現して種々の性體にあらず。一方には常に顯助し一方には常に寂滅清淨。

### 不斷光

意志は信仰の始終なり。初發心も意志にして、發動的に進歩するも意思、不退に注意するも正定聚も成正覺も意志が掌る所なり。故に不斷と云ふ。は無間斷の義。また目的を執持して極めて密緻にして金剛の如くに破壊すべからざるも亦意思なり。



一 客體の恩寵にして其本質は神聖正義の大智慧と勢能にして最とも金剛の如き一切智と一切能との精神能、能く人の意志の惡素質を脱却して神靈同化の功能ある勢能にして、常恒不斷の進歩靈化すべきものなり。一時のものにあらずして初發心より終局に至るまでの過程なり。故に不斷と云ふ。

二、人の意志に惡素質ありて宗教意志に適せざるものとは即ち、一、世俗的情操。

二、世界的動機 三、自我幸福主義。

一、世俗情操とは常識人倫及び其已下を根據として安立せる情操。其志節情操にして常途の人道にして超人間の高尚なる理想菩提心なきは、高等なる宗教的意識より見れば野卑なる情操たるを免れず。

伯夷叔齊が清澁なる志節も屈原が皎々たる志操を以て身を汨羅に投ずるも其情操に於る人倫としては清潔なるも、未だ聖靈の極積的情操なき時は宗教より見れば世俗的情操たるを免れず。況んや世俗的名利の爲にせば義としも未だ俗臭を免れず。

法藏が佛の説法を聞いて心に悦豫を懷き尋ち無上正眞の道意を發し國を棄て王を棄て行して沙門となりまたたとひ身を諸の苦毒の中に止むるも忍て悔じ、我超世の願を起すと。釋尊國と財と位を棄て山に入り道を學ぶ。志節高くして昊天の如く明なること日月よりもすぎたり、慧遠の志氣高潔にして皓月の如く、善導の情操雪よりも白く、法然上人志操蓮の如し、たとへ王宮を度するも身に纏ふは黒の素絹に安陀衣に過ぎず自らいふ、烏帽子も衣ぬ男、愚痴の法然房と。

キリストの義として身を犠牲にし、ソクラテスの毒に死するも精神の正義は永久に滅せざる如きは是また出世菩薩の情操に非ずして何ぞや。

人にして邪見暴惡の地獄的情操なるあり。嫉忌慳貪にして餓鬼の意志あり。開味横着なる畜的情操あり。憍慢主義なる修羅道あり。

#### 世界的動機

世に感覺慾を目的とし、權威を追求め、財貨名譽榮光すべてこの有爲の境界に慾望し、高貴權門の寵を喜ぶ宗教家あり。世福をねがふ祈禱僧あり。

神は世界の幸福を興ふと信する如きは

未だ宗教に入らざるものの如きは、本より其慾望する處地獄の囚にあらざれば是餓鬼の業。肉慾の畜的にあらざれば我慾の餓鬼、名譽權威の修羅。

宗教の門に入て尙ほ有爲の幸福を神に祈り浮世の榮をもとめ、冥鑑を顧みず顯著紫袍虚飾を誇つて名利を貪る如きはいふに足らず。

釋尊國と王と位とを棄て世間の榮を棄て一に無上道を求め、遺師が世間の榮耀浮雲の如し。名は是香をたきから。

#### 智 慧 光

大智慧光明態。此光にて客體と關係の中に在りて其實在を證明すべくこの光によつて佛知見を開示して佛の實在を悟入するものなり。之を啓示といふべきなり。是觀念的に其本質性情を認識し本より心機に於て客體と交渉に於て證明すべきものなれば學識知解の圍籠を超越して三昧的に其實在と關係に於て其本質を諦かに認可證明すべし之に反し人の智力に於て之が障礙となりて其眞理を證明するに雲翳となるものは妄想惡知惡覺觀等なり。

見惑の十、見惑は身邊邪取等の十種の惑が心を障て正知見を開示せざらしめ、五蓋妄念妄覺等は行を障ふ。

正知見を開展して其實在を證明し悟入すべき形式は先づ三種とす。

一、感覺的に淨土の莊嚴相好光明等依正二報莊嚴等。

二、抽象にして佛の四智十力等。是佛の屬性を觀念的に悟入す。

三、理想にして佛の本體即ち法身を觀念す。

是三昧發得して佛 實在を證明するとき尙其本質實體を究むる時は廓然として無生法忍を悟ることを得べし。

觀經に韋提希五百の侍女と共に佛の所説を聞き時に應じて即ち極樂世界の廣大の相を見る佛身及び二菩薩を見ることを得て心に歡喜を生じて未曾有なりと歎じて廓然として大悟して無生忍を得。

無生忍とは自己の心性と絶對なる理性と同體一理なることを觀念的に證明し忍識せるなり。自己の心性と絶對理性とは本より同一體の理性なれども唯心象の妄想分別の翳塵によりて之を自己の心性なりと認めて其根底なる心理に到達すること能はず。人

自己心理の根底に觀念し工夫して絶對理想に凝神し、妄想妄觀悉く排除し、其極度に到て洞然として一如の深底に到れば、この心理に自我の浪なく湛然たる大海の如し。自我の妄塵なく、蕩々たる心象は念々に生滅し甲の念滅すれば乙の念生じ、前塵と共に起滅して止ことなし。蕩然たる理性は寂靜にして常に同如、前念の滅に非ず、後念の生に非ず。

衆生本無生を悟り、衆生は是衆理の聚る處、法のみあつて實の衆生なし。法もと無生の理を覺るとき無生滅忍と名づく。深く此理をさとり、心性常寂滅にして、靈明虛徹して、理十方に圓照し三際を徹するは是阿彌陀の體が人の心理に啓示として知見したる彌陀の體なり。心性常寂なるは無量壽、寂にして常に照すは無量光。故に彌陀の理性を知見せらるゝとき寂滅忍を得るなり。

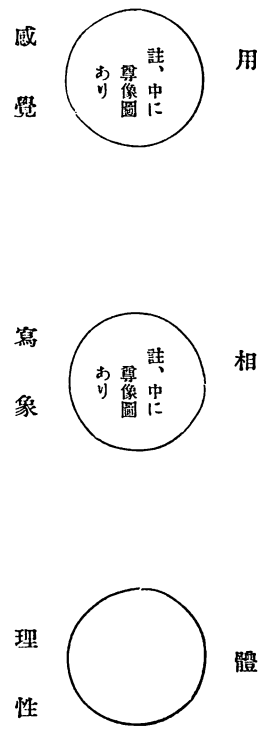
問。無生忍寂滅忍等とは法身菩薩の證入すべき處にして凡夫の境界に非ざるべし。如何に現身に之を證明する。

答て。若し因果の上に彼の報土に入りて而して後と、未だ現在との區別を異にして論には現身にては觀念的に無生法忍寂滅忍を證入し、この習慣が性となりて後には生得的實在的に此の機制を依身を脱却する時は實在的に大滅度無爲涅槃を實現し來るべし。

此無生寂滅忍なるも人に苟も人格を有せる完全なる精神を有せるものにして之が形式備はらざるものなかるべし。然れども意志を注ぎ精を研ぎ神を凝して實現することに耐へざるのみ。況や生存競争の過激なる現時の如き物質的文明の潮流に際してはとも神人合一理性意志をして理性の即ち智慧光に朝する如きは甚だ遠し。然れども斯の如くの價値は何時代たりと雖も失ふべきものに非ず。

智慧光は個人の心理に彌陀の智慧光を被りて、客體の光により客體の存在を認識せしむる光なるを以て、此光によりて彼客體の形而上なる體と相と用と本質を個々の心理に實現し來るものにして、譬へば形而上にては虚空間と太陽との如し。心理にては

人は眼と心とを以て大空間及び太陽を望み見るが如し。如理に心理に映現し來るものを認識し證明するのみ。



一、感覺は此光に依て六根清淨となりて感性徹交し靈明にして清淨なり。  
二、感情無限の愛光に喜光にうたれて喜愉快樂あげていふべからず。  
三、智力には彼用と相と體とを諳かに知見し悟達し其實在を認識して無生寂滅忍をう。

四、意志には神聖同化此を情操とし動機とし靈化し終局目的に向つて此によつて行動す。

一、世尊諸根悅豫姿色清淨にして光顔巍巍たるは12を表示し  
二、無盡の大悲を以て三界を矜愛するは。  
三、如來正覺其智量り難し、慧見無碍にして能く退絶することなし。  
四、光く道教を開き羣萌を拯はんと欲し恵むに眞實の利を以てす。  
右の四種は釋尊の客體とする彌陀の心理的關係より彌陀の意志實現として尙之を所化の衆生に自己の心機に實現せる彌陀を言と相貌とに示現せられたるものなり。

- 1 客體を感じたる光りが反寫として感覺に現はれたる。
- 2 彌陀の愛光あるを知らざる衆生を實に哀むべきが故に。
- 3 客體の境質に不可思議無量の故に是を知見悟達する智慧も。

4 道教とは彌陀の不可思議の徳をもて衆生に紹介せんと、眞實の利とは彌陀は衆生を靈化するが故に。

1 奇特の法。感覺。諸根悅豫光顔ことなることなし。

2 諸佛所住。感情。如來無量の大悲を以て三界を矜哀し。

3 導師の行。意志。光く道教を闡き羣萌を拯はんと欲し恵むに眞實の利を以てす

4 如來の徳。理性。如來正覺其智量り難し導御すること多し。

慧見無碍にして能く邊絶することなし。

5 最勝道。如來定慧究暢して極りなし一切の法に於て自在を得たり。

昭和六年二月二十三日印刷  
同 二月二十八日發行

誌代年貳圓(郵税共)

編輯兼 山崎 辨成  
發行人

東京市小石川區小日向臺町三丁目  
印刷人 春山 治部左衛門

發行所 東京市小石川區水道端二ノ四四  
ミオヤのひかり社  
振替東京六八五一番